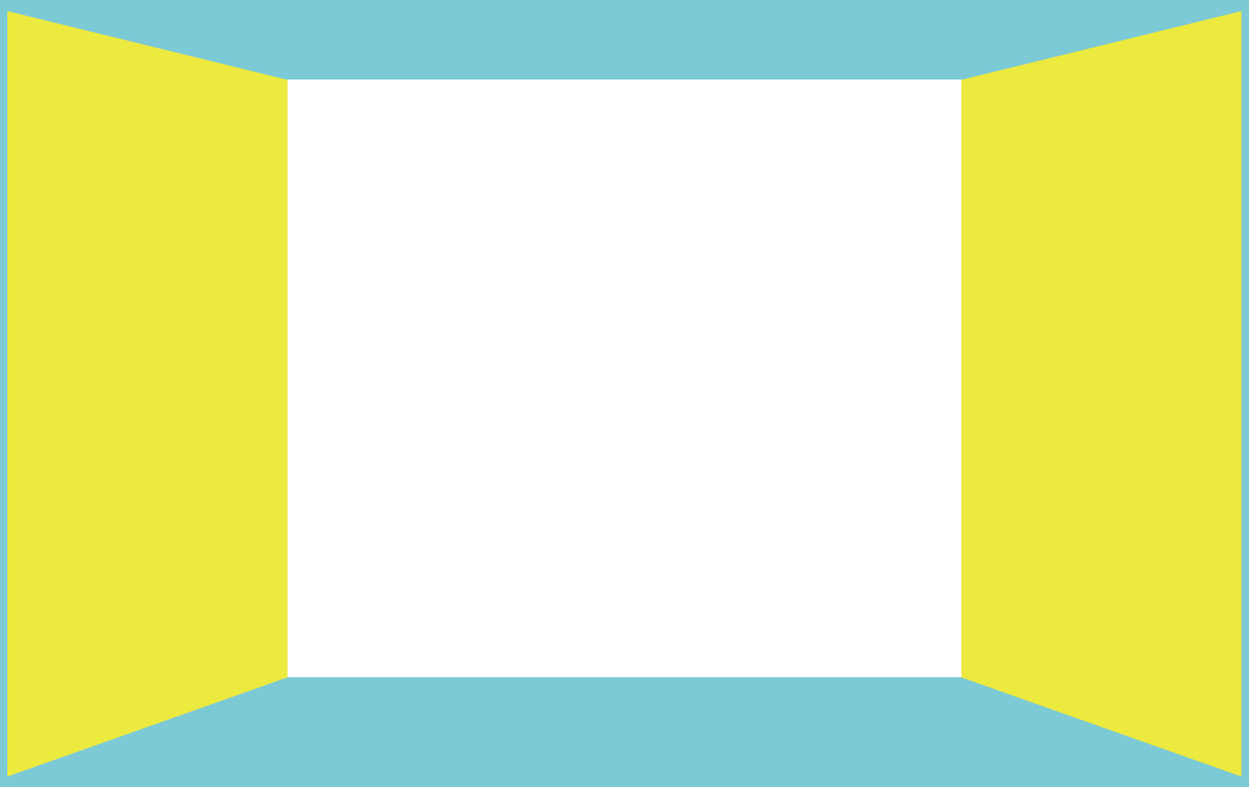


多摩美術大学芸術学科
展覧会設計長谷川祐子ゼミ企画

ハートオープナー

2013 年 10 月 12 日（土）— 10 月 21 日（月）
9:00 ～ 21:00

会場	：	SHIBAURA HOUSE 1F　東京都港区芝浦 3-15-4
入場料	：	無料
出展予定作家	：	岩崎貴宏
		小松宏誠
		鈴木康広
		曽谷朝絵
		林ナツミ
		plaplax
企画	：	多摩美術大学美術学部芸術学科　展覧会設計ゼミ
総合アドバイザー	：	長谷川祐子　多摩美術大学美術学部芸術学科教授 東京都現代美術館チーフキュレーター
空間アドバイザー	：	岡田公彦　建築家／岡田公彦建築設計事務所

PRESS RELEASE

開催趣旨

私たちは様々な情報をパソコンや携帯電話、テレビなどのあらゆる方法で受け取っています。また、生活の中に流れ込む情報のスピードはすさまじく、計り知れない量となっています。そうした状況において私たちは、一つ一つの情報や物事に対し視野を広め、柔軟な見方や考え方を持つことが必要になってくるのではないでしょうか。

今回、出展される作品は日常生活の風景や現象を用いて、新たなものの見方や驚き、感覚を生み出すという特徴を持っています。これらの作品たちは、鑑賞者に物事に対する多様な見方や考え方、捉え方などを再発見させるきっかけになるでしょう。そして私たちは、その発見によりもたらされるものが、鑑賞者の日常生活にも作用していくことを望みます。

開催概要

多摩美術大学芸術学科展覧会設計ゼミ企画展「ハートオープナー：heart opener」

開催日程：2013年10月12日(土)～10月21日(月)　9:00～21:00
会場：SHIBAURA HOUSE 1F　東京都港区芝浦3-15-4
入場料：無料
出展予定作家：岩崎 貴宏
小松 宏誠
鈴木 康広
曽谷 朝絵
林 ナツミ
plaplax
企画：多摩美術大学美術学部芸術学科　展覧会設計ゼミ
総合アドバイザー：長谷川 祐子　多摩美術大学美術学部芸術学科教授
東京都現代美術館チーフキュレーター
空間アドバイザー：岡田 公彦　建築家／岡田公彦建築設計事務所
協力：NECディスプレイソリューションズ

お問い合わせ

多摩美術大学美術学部芸術学科　展覧会設計ゼミ　広報担当：荒川(080-1106-7868)
E-mail：cpue2013@gmail.com
〒192-0394 東京八王子市鑓水2-1723
多摩美術大学　美術学部芸術学科　研究室内
http://www.tamabi.ac.jp/geigaku/CPUE/2013

CPUEについて

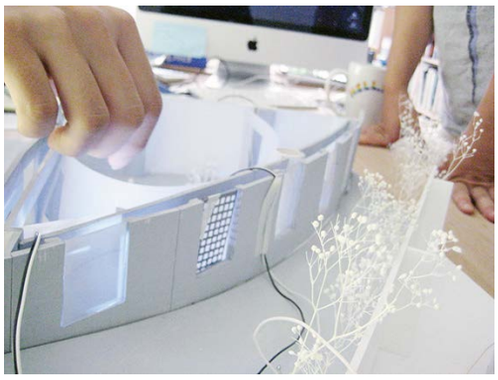
多摩美術大学 美術学部芸術学科 展覧会設計ゼミ＝CPUE (Curatorial Practice in the Urban Environment) では、長谷川祐子教授のもと、都市の中で展覧会をつくるというキュレーションの実践を通じて、現代アートと人々を結びつけることを意図しています。

当ゼミの特色は、展覧会のための場所選び、作家選定、展覧会テーマの設定などをはじめ、予算の振り分け、フライヤーデザイン、広報活動、企業への協賛打診といった、展覧会運営を取り巻く、ありとあらゆる業務を学生主体で執り行うという点にあります。

一般の方々に広くアートに触れてもらい、より豊かな対話が生まれる場所づくりから展覧会を構想しており、展覧会は毎年違う地域で開催されます。1回目の「ときめき☆エンカウンター」(2006、秋葉原UDX・秋葉原)を皮切りに、「感情の強盗」(2007、BankART・横浜)、「ダブル・クロノス」(2008、瑞聖寺アートプロジェクト・白金台)、「5＋1ジャンクションボックス」(2009、Vacant・原宿)、「陸離として」(2010、Sedona・代官山)、「DROP ME!」(2011、Nitehiworks・黄金町)、「クラウド［cloud/crowd］~I' m here~ (2012、ギャラリーLE DECO・渋谷)など、場所の特性を活かした展覧会を企画してきました。それぞれの場所性を通じて、作家と共に展覧会をつくりあげていくことを目指しています。

過去の参加アーティスト

assistant/ 松原慈＋有山宙、池田光宏、石上純也、岩井優、岩崎岳留、榎忠、大西麻貫＋百田有希、大巻伸嗣、柿崎順一、金氏徹平、北川貴好、キム･シンウク、木村太陽、荒神明香、国立天文台4次元デジタル宇宙プロジェクト、小牟田悠介、櫻井裕子、志村信祐、ショウダユキヒロ、真珠子、SONTON、高木正勝、髙橋涼子、田口行弘、チャン・ヨンヘ重工業、チョン・ジア、Chim↑Pom、中島崇、永山真策、西尾美也、東恩納裕一、藤本隆行、松延総司、水木塁、宮永亮、山下麻衣＋小林直人、山本聖子、和田昌宏
(50音順敬称略)



開催地　芝浦について

ウォーターフロントとして新たな発展を続ける芝浦ですが、江戸時代は干潟であり、まだその土地すらありませんでした。明治後半から始まった東京港湾の埋め立て拡張が進んだことで一体の景色も急変しました。未だに残る運河や、港町の面影を残しつつ、過密化する都市の新たな開発都市として賑わいをみせています。港町として物流を担ってきた芝浦は、オフィス街として姿を変えつつも今なお、人やモノが集まり、また流れゆく場所といえるでしょう。

今回私たちは、ここ芝浦で過ごす子供から大人まで全ての人々が、日常のなかで現代アートに気軽に触れることが出来る展覧会を開催します。

SHIBAURA HOUSE について

今回 CPUE が会場に選んだ SHIBAURA HOUSE は普段、アートギャラリーではなく、コミュニティスペースとして機能している場所です。透明感、開放感にあふれる空間を設計したのは世界的に著名な妹島和世氏。レンタルスペースとしても開放されており、ワークショップやセミナーなど、様々なイベントが開催され、多くの人々が足を運んでいます。

そして、全面ガラス張りの開放的な空間は、誰もが気軽に寄り道出来る場所であるといえます。私たちはそのような開かれた交流の場に展覧会を出現させることによって、幅広い年代の人が日常の中でアートと出会うことを期待します。私たちは本展をとおして、日常の中に密着した場所で日常から少しだけ違った体験をすることで、新たな想像力が芽生えることを願います。

photo:Forward Stroku Inc.

photo:Forward Stroku Inc.

長谷川祐子（CPUE担当教授）について

批評を基幹に据える国際派キュレーターとして活躍。
東京都現代美術館チーフキュレーター、多摩美術大学美術学部芸術学科教授
グッケンハイム美術館 アジアカウンシルボードメンバー 美術評論家連盟会員

経歴

京都大学法学部卒業
東京芸術大学院美術研究科西洋美術史専攻修士課程修了
1989年　水戸芸術館学芸員
1993年　世田谷美術館学芸員
1999年　金沢21世紀美術館学芸課長
2005年　金沢21世紀美術館芸術監督
2006年　東京都現代美術館チーフキュレーター
　　多摩美術大学美術学部芸術学科教授

展覧会歴

2003年　第50回ヴェネツィア・ビエンナーレ 日本館コミッショナー
2006年　マシュー・バーニー：拘束のドローイング（金沢21世紀美術館、
　　アメリカのサンフランシスコ近代美術館、韓国のサムスン美術館Leeumを巡回）
2007年　マルレーネ・デュマスーブロークン・ホワイト（東京都現代美術館）
2010年　東京アートミーティング トランスフォメーション
　　中沢新一共同企画（東京都現代美術館）
2010年　第12回ヴェニス建築ビエンナーレ
　　アーティスティック・アドバイザー
2011年　犬島家プロジェクト　アーティスティック・ディレクター
2011年　建築、アートがつくりだす新しい環境　SANAA共同企画（東京都現代美術館）
2012年　香港アートフェア　Art　Projects　キュレーター
2012年　アートと音楽　ー新たな共感覚をもとめて　坂本龍一共同企画（東京都現代美術館）
2013年　第11回シャルジャ・ビエンナーレ キュレーター
2013年　アートバーゼル香港　Encounters　キュレーター

著書

2004年　「21世紀の出会い一共鳴 ここ・から」(淡交社)
2010年　「女の子のための現代アート入門」(淡交社)
2011年　「『なぜ?』から始める現代アート」(NHK出版新書)
2013年　「キュレーション 知と感性を揺さぶる力」(集英社新書)

作 家 紹 介

本展覧会は６名の作家によって構成されています。
私たちにとって身近なモノであるタオルや歯ブラシなどから、都市のミニチュアを再構成する岩崎貴宏。
羽根をモチーフにした作品で、儚く幻想的な世界を生み出す小松宏誠。
私たちが良く知っているものや現象を元に、驚きと発見に満ちた作品を制作している鈴木康広。
鮮やかな色彩を用いて光や音を視覚化し、キラキラとした躍動感のある表現を続ける曽谷朝絵。
日常の風景の中で浮遊する写真を撮り続けている林ナツミ。
私たちに馴染み深いものを用いて、インタラクティブな作品を創造する plaplax。
こうした作品群は私たちに何を気付かせてくれるでしょうか。

iwasaki takahiro
岩崎　貴宏

komatu kosei
小松　宏誠

suzuki yasuhiro
鈴木　康広

soya asae
曽谷　朝絵

hayashi natsumi
林　ナツミ

plaplax

岩 崎 貴 宏

《アウト・オブ・ディスオーダー（コニーアイランド）》
サイズ可変
ビーチタオル
2012
courtesy of the artist and ARATANIURANO

タオルなど見慣れた日用品に手を加えて、繊維質なものを解きほどいてミニチュアの風景を再構築するインスタレーションを制作。

素材に髪の毛や糸、埃などを用いて紡ぎだされるミクロの世界は、心はずむようなユニークな驚きとともに、日常となった風景を少し引いた視点から見つめ直すような感覚を与える。この人工的なミニチュア都市は、素材を再構成することで生じるズレを増幅させ、どこかで見たことがあるような擬似風景を思わせつつ、実現することのない仮想都市をも想起させる。

入れ子構造に素材を組み替えながら織り成される作品は、素材と作品の明確な境界がなく、どこか非日常的でおぼろげな印象をもち、思わず目を凝らしてしまう。

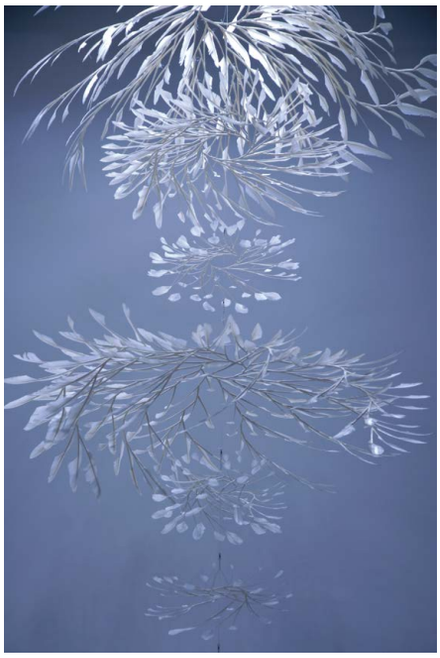
略 歴

1975 年　広島県生まれ
2003 年　広島市立大学芸術学研究科 博士後期過程修了
2005 年　エジンバラ・カレッジ・オブ・アート（イギリス）大学院修了

展 覧 会 歴

2007 年　六本木クロッシング 2007：未来への脈動（森美術館／東京）
2009 年　第 10 回リヨン・ビエンナーレ　日常のスペクタクル（リヨン現代美術館／フランス）
2010 年　個展　フェノタイピック・リモデリング（アラタニウラノ／東京）
2011 年　ヨコハマトリエンナーレ -Our Magic Hour- 世界はどこまで知ることができるか？
（横浜美術館／神奈川）
2012 年　ダブル ビジョン：現代日本美術展（モスクワ市近代美術館／モスクワ）

小 松 宏 誠



《Lifelog_ シャンデリア》
4500×1200×1200mm サイズ可変
ガチョウの翼、ワイヤー、ベアリング
インスタレーション
2012
FUMA CONTEMPORARY

小松宏誠は主に鳥の羽をモチーフにした作品を制作しているアーティストである。羽で作られた花のシリーズ作品、重力に逆らうかのようにふわりと浮かんだ羽が空中でくるくると回り続ける作品など、鳥の羽の特性や構造を生かした繊細で幻想的な作品を生み出してきた。

本展覧会の出展作品《Lifelog_ シャンデリア _5》は、ガチョウの羽の輪が連なってできたシャンデリアである。鳥の羽という有機的な素材を用いることで、光の加減や角度によって一枚一枚の羽がその表情を変え、美しく華やかな表情を見せる。また、それぞれの羽の輪は風を受けると回転し、ゆっくりとした時間の流れと心地よい空間を生み出す一方、青白い光によって映し出された影は神秘的で、鑑賞者に清澄さとほどよい緊張感を感じさせる。鑑賞者はこの心地よさと緊張感の狭間に立つことで、非日常的な空間を体験することができる。

略 歴

1981 年　徳島県生まれ
2006 年　東京芸術大学 大学院 美術研究科 修士課程 修了
現在　　アトリエオモヤ所属アーティスト
　　東京大学大学院 情報学環 非常勤講師

展 覧 会 歴

2006 年　現象からの新しいかたち（和田画廊／東京）
2009 年　NO MAN’ S LAND（旧フランス大使館・本館／東京）
2010 年　Secret Garden Ginza Mitsukoshi Edition（銀座三越 9F テラスコート／東京）
2010 年　釜山ビエンナーレ ‘Living in Evolution’（釜山ヨットセンター／釜山、韓国）
2012 年　Buck to the Nature（FUMA CONTEMPORARY TOKYO ／東京）

鈴 木 康 広

《バケツの切り株》
350×400×270mm
繊維強化プラスチック、アルミニウム
2007

鈴木康広はりんごやまばたき、ファスナーなど、私たちがよく知っているモノや現象をもとに、驚きや発見に満ちた作品を制作している。

くるくると回り落ちる葉が「まばたき」をしているように見える《まばたきの葉》。ファスナーの形をした船が水面を切り開いて進む《ファスナーの船》。シンプルでありながら、思いがけないモチーフの結びつきによる作品は私たちを楽しませると同時に、日常の事象を改めて再認識させるきっかけになっている。

パラパラマンガから回転遊具の映像インスタレーション、玩具や文房具などのプロダクトデザインも手掛け、幅広い手法、メディアを用い、ジャンルを越えた制作を行う。

近年では、羽田空港を舞台にした大規模なパブリックアートプロジェクトや瀬戸内国際芸術祭 2010 に出展するなどパブリックスペースで作品を展開、海外での展覧会にも参加し、国内外で活動の場を広げている。

略 歴

1979 年　静岡県浜松市生まれ
2001 年　東京造形大学デザイン学科卒業

展 覧 会 歴

2008 年　個展「Aerial Being」(IERIMONTI Gallery ／ミラノ)
　　三宅一生ディレクション「XXIc.-21 世紀人」(21-21DESIGN SIGHT ／東京)
　　セビリアビエンナーレ 2008 (アルハンブラ宮殿／グラナダ)
2009 年　Digital Public Art Exhibition in Haneda
　　「空気の港　テクノロジー × 空気で感じる新しい世界」(羽田空港ターミナル／東京)
2010 年　瀬戸内国際芸術祭 2010 (香川)
2011 年　個展「BORDER- 地球、まばたき、りんご、僕」(浜松市美術館／静岡)
　　モスクワビエンナーレ 2011 (モスクワ)

作 品 集

2011 年　『まばたきとはばたき』(青幻舎)

曽 谷 朝 絵

《鳴る光》
可変
床と壁にフィルム
2013
水戸芸術館現代美術ギャラリー

鮮やかな色彩を用いた絵画、インスタレーション、映像などの多岐にわたる領域でファンタジックな作品をつくり出すアーティスト。
日常生活の中にある様々な出来事に繊細なまなざしを向け、身のまわりの品々やふとした日々の光景を幻想的に表現している。日向から日陰に入った時や、水の中に潜った時など、自分の位置関係はそのままに世界が変わっていくような、そうした日常を少しずらすことで生まれる非日常的な瞬間を写しだす作品を制作している。
音を奏でるように色を用いる彼女の作品は、鑑賞者の視覚を超えた身体感覚を刺激し、身体が光に包まれたような錯覚を呼び起こす。それらの作品は自ら光を放つ仕掛けでもあるかのように、ゆるやかに広がる柔らかな光や色彩と躍動感に溢れている。虹のように色彩豊かに多様な煌めきを放つ作品は、瑞々しい輝きの印象を私たちに与えてくれる。

略 歴

2006 年　東京藝術大学大学院にて博士（美術）取得。
2001 年　『第 6 回昭和シェル石油現代美術賞展』グランプリ受賞
2002 年　『VOCA 展 2002』VOCA 賞（グランプリ）、他受賞多数。
http://www.morning-picture.com/

展 覧 会 歴

個展

2007 年　Prism（西村画廊 / 東京）
2010 年　鳴る色（資生堂ギャラリー / 東京）
2011 年　Swim（おぶせミュージアム / 長野）
2013 年　曽谷朝絵展　宙色（そらいろ）(水戸芸術館現代美術ギャラリー／茨城)

グループ展

2002 年　第 1 回 府中ビエンナーレ ダブル・リアリティ (府中市美術館 / 東京)
2003 年　こもれび展 (水戸芸術館 / 茨城)
2005 年　Art Today 2005 (セゾン現代美術館／長野)
2007 年　『放飛新世界　日本当代絵画』(PYO GALLERY/ 中国、北京)
2011 年　『ニューアート展 NEXT 2011 Sparkling Days』(横浜市民ギャラリー / 神奈川)

林 ナ ツ ミ

（左）《Today's Levitation 06/18/2011》
（右）《Today's Levitation 04/22/2011》
©Natsumi Hayashi, courtesy MEM

林ナツミは日常の風景の中で浮遊する自身を撮影した、セルフポートレートのシリーズを制作している。

2010 年の秋から撮り始められたこのシリーズは、2011 年 1 月から自身のウェブサイトで公開されてきた。このシリーズは CG 合成を使わずに撮影されるため、浮遊写真を 1 枚撮るために 200 回以上のジャンプがおこなわれることもあるという。

浮遊写真には、重力から解放されることによって社会的なくびきからも解放され、何ものにも縛られない本当の自分を感じられるのではないかという思いが込められている。本展覧会では、浮遊写真のシリーズをガラス面に投影することで、会場に面した街路を心地よい浮遊感で満たしていく。

略 歴

1982 年　埼玉県生まれ
2005 年　立教大学文学部卒業
2007 年　立教大学大学院コミュニティ福祉学研究科博士課程前期課程修了

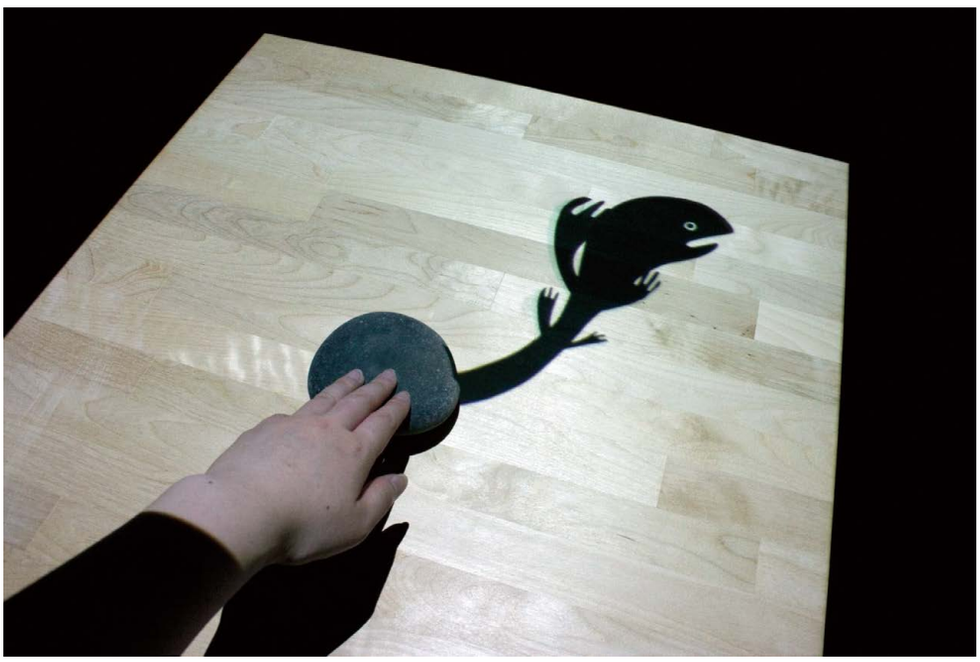
展 覧 会 歴

2012 年　『本日の浮遊』（MEM ／東京）
2013 年　Today's Levitation（RICHARD LEVY GALLERY ／アメリカ）
　　『本日の浮遊』（スパイラルガーデン／東京）

作 品 集

2012 年　『本日の浮遊』（青幻舎）

plaplax



《石ころのカチナ》
700 × 600 × 600mm
石、木、タッチセンサー、コンピュータ、プロジェクタ等
インスタレーション
2011

1996 年頃から近森と久納でコラボレーションを開始し、2000 年に minim++ を結成。2002 年に筧が加わる。現在は小原も含めた４人で主にインタラクティブアート分野での作品制作を行っている。また企業や大学との共同研究、公共空間や商業施設の演出なども手がけている。

彼らは多くの人にとって馴染み深いモノや現象、例えば石ころ、花、影などのモチーフを用い、触覚、嗅覚、視覚などの私たちの感覚を刺激する。作品は暖かく愛らしい表現で、子供から大人まで幅広い年代の鑑賞者の好奇心を沸き立たせる。鑑賞者は彼らの作品を見ることで、普段私たちにとって身近なモノを新たな姿で体感し、それらを再認識するとともに新たな感覚を発見する。本展覧会においても plaplax の作品は会場に訪れる人に、笑顔とともに驚きと発見を与えるだろう。

略 歴

近森基／ Motoshi Chikamori	1971 年	東京都生まれ
	1998 年	筑波大学大学院芸術研究科修了
久納鏡子／ Kyoko Kunoh	1972 年	東京都生まれ
	1997 年	慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修了
筧康明／ Yasuaki Kakehi	1979 年	京都府生まれ
	2007 年	東京大学大学院学際情報学府 博士課程修了　博士（学際情報学）
小原藍／ Ai Ohara	1979 年	東京都生まれ
	2003 年	武蔵野美術大学造形学部映像学科卒業

展 覧 会 歴

2005 年　Ombres et Lumière（Centre Pompidou ／ Paris, フランス）
2007 年　Ars Electronica Center Exhibition（Ars Electronica Center ／ Linz, オーストリア）
2009 年　NO MAN'S LAND（在日フランス大使館・旧館／東京）
2011 年　SIGGRAPH2010（Los Angeles Convention Center ／ Los Angeles, アメリカ）
2013 年　個展 ハナハナのハナ - 香りのカタチ -（ポーラミュージアムアネックス／東京）